村上忠順翁顕彰会報

目　次

あいさつ
●忠順とその周辺の資料(三)……1ページ
●切枝と忠順……3ページ
●遷祠碑……7ページ
●歴史探訪記……9ページ
●表紙のことば……11ページ
●編集後記……11ページ

村上忠順翁顕彰会報
第　10　号
編集　村上忠順翁顕彰会
事　務　局
発行　平成11年3月1日
村上忠順翁顕彰会

村上忠順翁顕彰会報十号発刊によせて

豊田市長　加藤正一

年号が平成になって早いもので十年余が過ぎ、毎年度発刊の貴会々報もここに第十号を迎えられ、心よりお喜び申し上げ、会員の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

貴顕彰会は、忠順翁の立派な業績を一つ一つ着実に顕彰され、たゆむことなく十年間歩み続けてこられました。平成十年度には、貴会創立十周年を期に当市郷土資料館において「村上忠順と蓮月展」を開催いたしましたところ大変ご好評をいただきました。この企画展は幕末期、京の文人太田垣蓮月と忠順との交流を多くの貴重な資料により紹介したもので、遠くは東京・鎌倉からの来館者もあり、多くの人々に深い感銘を与え、二人の文人を知るよい機会となりました。

さて、今世紀も残すところ一年余となり、二十一世紀は本格的な国際時代が到来し、国や地域といった枠組みを超えた様々な動きが活発化すると予想されます。そのような時代だからこそ、私たちが国や都市、そして地域社会や家庭に対して誇りを持ち、日常生活を送ることが大切になると思います。

そして、当市の歴史を振り返るとき、その中には蓄積された文化があります。「歴史の重み」とは、まさに長年にわたり蓄積された人々の努力の重みであり、それが現代を生きる私たちの基盤であります。それを常にきちんと認識し、そのうえに確かな一歩を重ね、次の時代に引き継いでいくことが私たちの責務であると考えます。

最後に、忠順翁が生涯こよなく愛された三河の地、ここ豊田市の風土と偉大な業績を更に深く究明し、当市の目指すまちづくりと魅力ある人づくりに反映されますようご期待申し上げ、貴顕彰会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を祈念し、ご挨拶といたします。

会報十号によせて

村上忠順翁顕彰会々長　石川隆之

寒風が身をさす厳しかった冬もいつしか去り肌にふれる風も心地よく感じられる季節を迎えました。会員の皆さまにはいよいよ健やかにお過しのこととお慶び申し上げます。

忠順翁顕彰会々報も今回で第十号となりました。これも会員の皆さまやご支援下さった多くの方々のおかげであり心より感謝申し上げます。

さて十周年に当る今年度は、かねて念願しておりました記念事業として「忠順と蓮月展」が市のご理解により郷土資料館において開催することが出来ました。市内はもとより、東京・広島・京都からもご来館頂き忠順翁と蓮月尼の偉大さを改めて知らされました。豊田市にとっても又私たち会員や地域にとっても誇り得ることであります。

今、豊田市は二十一世紀に向けて魅力ある都市づくりを目指し、住みよいまち、のどかさを生かした街づくりに取組んでいます。星霜を経て私たちの忠順翁顕彰会活動が誇れる地域の魅力としてその風格形成に少しでも寄与できればと思います。また十年を一つの節目としてその歩みを回顧し、記録の総てを集大成した「十年のあゆみ」を近々発刊し、会員の皆さまに領布できる予定です。今後も忠順翁顕彰会に課せられた調査研究は際限もなく会員の皆さまとともに真摯にとりくんで参りたいと願っています。皆さまのご協力とご自愛を祈念し会報第十号発刊のことばといたします。

神光院

忠順とその週辺の資料(三)

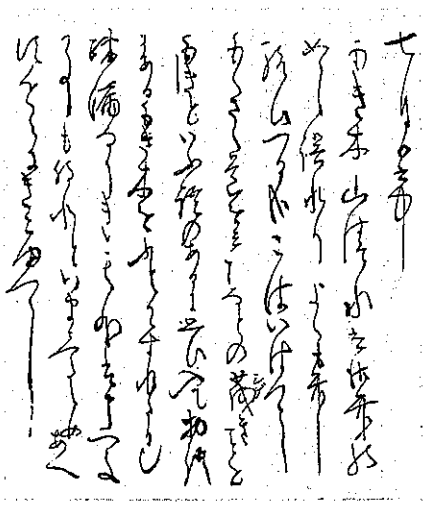
簗瀬一雄

(一)　忠順筆のメモ（方丈記）

大火　安元二年
　　四十三ノウ
辻風　治承四年
　　四十四丁ノウ
遷都　同年六月
　　四十五ノウ
飢饉　養和　飢死人洛中四万二千三百余
　　五十丁ノオ
　　同ウ
疫癘　養和
　　四十八ノウ
地震　元暦二年　安元元年ヨリ元暦
　　五十丁ノウ　二年マテ僅ニ十一年也
　　建暦二年マテ卅九年也
祖母ノ家相続　五十三ノウ
　　菴
出家遁世　五十四ノオ
　　方丈ノ家
蝉丸猿丸太夫墓　五十七ノオ
元亨釈書巻十二ニ長明ト云人アリ康保年中積薪入内自焚トアリ今トハ別ノ人也

(二)　忠順筆のメモ（書翰の控）

七日の書中
もき木山清水は御弁の如し。誤れり。よくも弁し給ひつる哉。こはいはつゝし白くさく道をミてなとの茂きことをもきといふ語のあるに思ひ入て物語にあるもき木をふとわすれたる也。疎漏なりき。其外は申へき事も侍れといましたゝめあへす近々にきこゆへし。



(三)　忠順筆書簡の控え（切紙）

柳帯露
起臥を風にまかせてかひなくも
　糸よりつたふ青柳の糸
　下ノ句ノ意イカヽ

(他筆)
青柳のいととハ書損也。露ニて御座候也。

言出恋
咲出る花にあらふかわか恋ハ
　コノ意イカヽ

(他筆)
高松家ニても
意不相知候哉。御点も御評も無御座候。

竹裏雀
風さわく竹の林のむら雀
　う□にしてゝ　やこゝら鳴声
　下句イカヽ

(他筆)
こゝらハ多キ事ノヨシ。
又曰。四ノ句ハイカニト問ヌルナルニコヽラノコトト心エタルハイカニ。コヽラハコヽタトモ、コヽタクトモ古事記万葉集ナトニミエテ、モノヽオホキコトナルコトタレカハシラサラム。

時鳥　高松君
花の後花にハあらて待ひとに
　心言葉を尽させにけり

此御歌時鳥の題詠にてありなから、子規の名をよみいれ給ハす。小子抔平生よみ候ニハ其品をよみ入されハ落題とかいふ事ニ相成候哉と心え居候所、この高松君の御歌ミれハさる事なきにやとおほえ申候。此ころ湧蓮集を見候ニ、時鳥幽なりといふ題を
　仄にも鳴て過けり夏立て
　けふ三か月の入方の声
此歌に時鳥の名をよまさりけれハ、かへしとて、
　時鳥姿やいつこ入月の
　ほのかに過し声の残りて
とよみて、冷泉為村卿の驚し給ひけるとかいふ事の聞え候へは、必よまてあるましきやと心え居候はひが事にや。承度候。

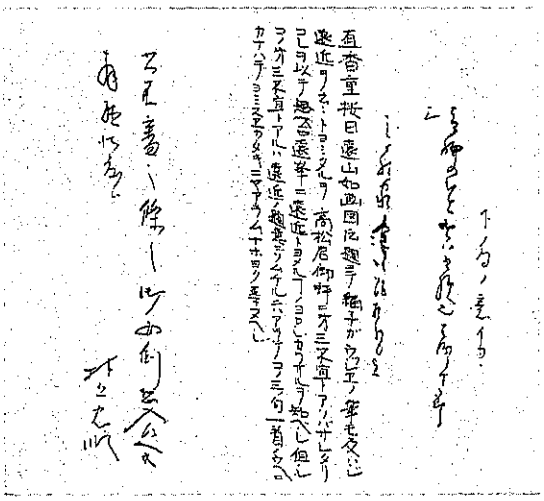
（他筆）
一首ニテ自然と時鳥の歌ニ相成候由、落題ニハアラサルムネ。

遠峯霞
霞にこめし遠近の山
此この遠近とハいかゝ。題に遠峰とあるに近き山ハ心えす候。しかし、かくよみても宜敷や。承度候。

（他筆）
近きハ不用の言葉ニ候へ共、高松家全からす□
直香重按曰。遠山如画図ト云題ニテ、縉子ガウツシエノ筆モ及ハシ遠近ヲ云々トヨミタルヲ、高松君御評ニ、第三不宜トアソハサレタリ。コレヲ以テ思フニ、遠峯ニ遠近トヨメルコトノヨロシカラサルヲ知ベシ。但シ、コノ第三不宜トアルハ、遠近ノ題意ニソムケルニハアラテ、コノ三ノ句一首ノウヘニカナハテ、ヨミスエカタキニヤアラム。ナホヨク尋ヌヘシ。
右不審の條々、御面倒恐入候へ共、拝聴仕度候。

村上忠順

（私注）高松君とあるのは、高松公祐（安永三～嘉永四）であり、直香は橘本直香（文化四～明治二十二）であろうか。直香は橘守部の門人であるが、堂上派と連絡のとれる立場にあったものと思われる。（他筆）としたものを、直香の筆と見てよいかとも思うが、断定しかねるので、このようにした。

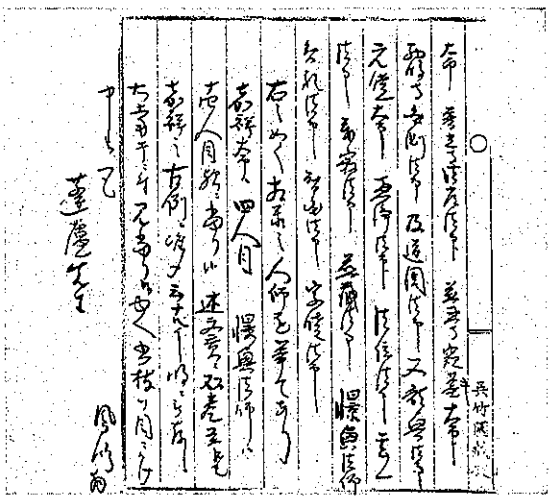


（三）忠順宛書簡（鳳鳴）
東大寺御門凝然大徳著浄土源流章十二丁ニ、三国之流伝の祖師之義明ニ（やく）處ニ震旦之弘伝之法師、浄影寺恵遠大師、天台ノ智者大師、嘉祥寺吉蔵大師、普光寺法常法師、慈恩寺窺基大師、西明寺圓測法師及道閑法師、又龍興法師、元暁大師、恵浄法師、法位法師、玄一法師、義寂法師、慈蔵法師、璟興法師、智禮法師、智圓法師、宗暁法師。
右之如く相承之人師を挙てあり。嘉祥大師ハ四人目、璟興法師ハ十四人目歟ニ当り候。述文賛ニ双巻経ト云モ、嘉祥之古例ニ准シテ云ナルコト明ニ被存候。右土用干ニ付見当り候ゆへ書抜御目ニかけ申候。以上

鳳鳴拝

蓮蘆先生

（私注）発信者の鳳鳴は未詳。荻生鳳鳴も岡鳳鳴も時代が合わない。



（四）忠順宛書簡（谷口雅範）
尚成べく至急ニ被下度候
未得拝謁を候共、遥々高風をしたひ鴈信拝呈候。時下秋冷之辰倍御康福仕拝察候。陳ハ生附僻気ニ富ミ聊言の葉の道に心をよせ居候得と、性質愚ニして、たま〳〵詠出る歌ハ腰折のみニして、入貴覧へき歌もなけれと、先頃□（雅カ）存とよみ出たる十番歌合□（巻カ）冊さし上候。御手数恐入候□（様カ）ハ十二分遥察候得共、成へくおもしろく御高評被下度奉願候。新誌上ニ君の

御高詠□（安々閑々カ）嬉しく再三感吟、君をしたふあまりに願上候。御朱料として金五拾銭の封呈上仕候。御笑納被下度候。愚詠□（不安カ）仰御添刪を度候得共、未不可調ニ付追々差上度、先ハ御願まて如此ニ御座候。

秋田県羽後国平鹿郡浅舞
十月一日　谷口雅範
邨上忠順大人

かちなくて行方もわかぬ沖つ海にたとる小舟
をあはれとハミよ
花にうたひあるハ月にもさまよひて身を安ミ
代とゝもにへなゝん

（私注）この書簡は非常に読みにくい。どうにも判らぬところは□とし、他は推讀してみたが、あやまり無きを保証し難い。

（付）前号の正誤表

三頁中段一一行	碧沖洞	碧冲洞
三頁下段三行	曽辺一	曽辺弓
三頁下段一四行	をゝく	そゝく
四頁上段　四行	過行	過行（こえ）
四頁上段　七行	まぬかれて	まねかれて
四頁中段二〇行	まちゝむ	まちらむ
五頁上段一〇行	所竊販改	所竊販歟
五頁上段一一行	所掠者改	所掠者歟
五頁上段一七行	宅日	它日
五頁下段一三行	をろも	をちも
六頁下段一八行	さきに	さきニ

匂桜と忠順

丹保飛桜越与免留　忠順

當末久之気参河乃国者志呂堂
幣能己呂母乃散登耳以尓之部仁咲
尓本非気無苑具波衆左久良能一本
遠徒世乃春濃左閑利尓雲知飛左
酒大宮人裳己東乃葉能簀左部閑
計亭免川羅師登米傳當末飛之越
以都之可裳所農樹者閑麗亭
歌堂里都藝以飛都具人毛遠左ゝゝ尓
幾己衣新里之乎穴川閑私布大田
乃乎連伊詩賀枝遠毛當梨登聞天
破呂ゝゝ尓以由幾天微麗婆安屋乎ゝゝゝ
宇良具波之裳与阿奈尓ゝゝゝ丘春新幾
可毛餘花那良怒朽木能朶能香尓
序丹賓邊留
香愚者之幾左久木微礼婆
冀丹紫邊煎差記希舞花之
於母保遊流可聞

※解読・書家　石川小歩

にほひさくらをよめる　忠順

たまくしげみかわのくにはしろた
へのころものさとにいにしへにさき
にほひけむそのくはしさくらのいちぎ
とおつよのはるのさかりにうちひさ
すおおみやびともことはのかすみさへか
けてめづらしとめでたまひしを
いつしかもそのきはかれて
かたりつぎいひつぐひともをさをさに
きこえしりしをなつかしふおおた
のかれいしがえだをもたりとききて
はろばろにいゆきてみればあやにあやに
うらぐはしもよあなにあなにくすしき
かもよはならぬくちきのえだのかに
てにほへる
かぐはしきさくらぎみれば
いにしへにさきけむはなし
おもほゆるかも

忠順の「にほひさくらをよめる」と題したこの一幅は、昨年秋、村上忠順翁顕彰会の十周年を記念して、豊田市郷土資料館に於いてひらかれた「村上忠順と蓮月」に展示されたものである。書家の石川小歩先生が会場においでになって、展示品の数々をご覧になり、すばらしいと賞讃された。ことに「にほひさくら」という音の響きには感じられる事が深かったご様子で、のちに解読して送ってくださったのであった。

「にほひさくらをよめる」歌は、長歌があって反歌がある。これといった歌ではなく、桜を愛でる単純な歌だと思ったのだが、大宮人とは誰のことだろう、大田のかれいしとは誰

なんだろう、と考えたとき、実は、挙母が名立たる桜の名所であったことに思い至り、何事にも好奇心旺盛な忠順が挙母まで花見に行ったのだと想像したのである。その挙母の桜を私も追うことにしたのだった。

1

挙母神社に「匂桜」と名付けられた桜がある。その傍らに、三河守左近中将藤原具氏が詠んだという歌碑が建っている。

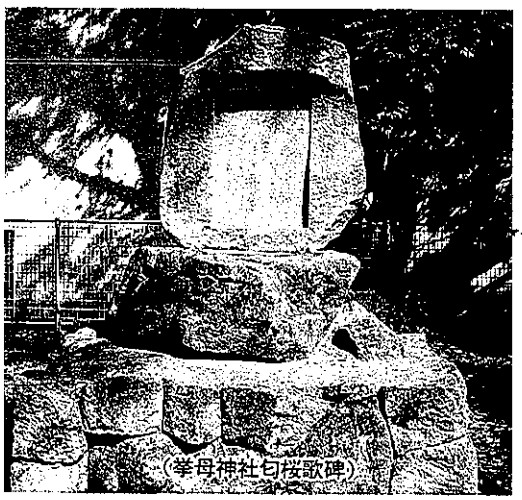
立ち帰り猶見てゆかむ佐久良花
衣の里ににほふ盛りを

挙母城主 三河守 左近中将　源具氏公詠

この歌の初見は文永二年（一二七五）七月に成立した白河殿歌合七百首で、のちに夫木和歌集に収められた。この頃のこの地は、高橋庄（文治三年・一一八三）が挙母郷那茶外（現在・豊田勤労福祉会館辺り）に認められている。高橋庄は建長六年（一二五五）まで続き、その後は梅坪字陣中に移り星野氏が治めた。歌の成立はこの時代と重なる。

詠者・藤原具氏は挙母城主・三河守といわれているが、混沌としたこの時代に本人が当地を訪ねたとは思われず、またその資料も文献も残されていない。具氏は遠い中央にいて、自分が治めている土地を詠んだのであろう。

弘仁二年（八一二）二月十二日、嵯峨天皇は、神泉苑に桜を植えて、観桜の宴を催した。これが現代に続く宮中花宴の始まりといわれている。万葉集や古今和歌集を羅列するまもなく、古来より桜は愛され謳われ続けてきた。それは地方においても然りで、桜の名所には数々の秀歌が残されている。具氏の匂桜の歌はこうした背景のもとに詠まれたのであった。


（挙母神社匂桜歌碑）

匂桜を追っていたら、「ギャラリー・こもれび」のご主人から、この桜についての貴重な資料をいただいた。それは挙母神社に奉納された絵馬の栞である。絵馬の説明文に「文字不鮮明なため、判読出来ない箇所があるので、違いがあるかと思われるがご諒解を」と断りがいれてあった。絵馬に描かれているのは、前書と歌一首、そして、具氏の立ち姿である。珍しいので全文を紹介する。

はるばると霞
わたれる空に
ちる桜めもけく
いまひらけむかな
色々みわたさるゝに
川ぞい柳の起臥
なびく水影る
おろかならずお
かしきをみ
ならび給はぬ人々
いとめづらしく
見捨がたしとて
おぼざるる
立帰り
猶見て行む
桜花
衣の
郷のにほふ
さかりを

水に映る柳の影、そぞろ歩きつ花見をする人々、閑かな春の情景を詠んだのだろうか。この前書が白河殿歌合のときにすでにあったのか、絵馬を奉納するときに、歌とともに、前書、立ち姿を書き足したものなのかは不明である。

歌人である忠順がこの歌に興を示さないわけはなく、供の者に弁当など持たせて花見に行く忠順を想像するとき、道中、どんな語らいをしたのだろうか、などと下世話なことも思われて、楽しくなってくるのだった。

2

長文だが、まずは牧野敏太郎著・牧野廉編の「挙母郷土史　付『郷土の御談』『郷土の畧誌』（敏太郎氏草稿に廉氏が加筆）より引用させていただく。それというのも文久元年（一八六一）生まれの著者が、文中たびたび「私の子供の頃」とか「一、三十年前の話だが」と断りを入れており、それは著者と忠順が同時代を生きたことになるからである。

（「櫻の名所の項」より）

「挙母神社ノ境内ニ二十年バカリ前マデ、朽チハテタ大木ガタッテ居リマシタ。ソレガ香櫻ノ株ト云ッテオリマシタガ、今ハドウナッテシマッタノカアリマセン。其ノ下ニ建テテアッタ芭蕉翁ノ句ノ刻マレタ石バカリガ残ッテイマス。其ノ句ハ、

木ノモトニ汁モ鱠モ櫻カナ

ト云フノデ、コレハ誰カ句集ノ中カラ見出シテ、刻ンダモノラシク、翁ハ此ノ櫻ノコトヲ詠ンダノカドウカ、何ノ考證モ見出セマセン又、愚老モ子供ノ時マデ、中町裏ノ路傍ニ香ヒ櫻トイウ枯木ノ株ガ遺ッテイマシタ。今ハドコニモコレト云フ立派ナ櫻モアリマセン。挙母ガドウシテ櫻ノ名所ニナッタカト云フニ、今ヨリ六百六十年ホド前ニ出来タ夫木集ト云フ歌書ノ左近中将具氏卿ノ咏ニ、

立チ帰リ猶見テユカン櫻花
衣ノ里ニ匂フ盛リヲ

トアリマス。東行説話ト申ス書物ニ『左ノ方ニ衣街道ト云フアリ。衣ノ里ヘ行ク道トヤ、春ハ霞、梅櫻、夏ハ卯ノ花、郭公名ニ負フ衣ノ里ト聞侍レド』トアリマス。ソレカラ、櫻名所ト申ス様ニナッタト見エマス。（田中正幅先生西加茂郡誌ニヨル）

俗傳ニハ、矢作橋ヲ通ル唐人、何カヨイ香ガスルト云ッテ川上ヲ尋ネ来テ、トウトウ挙母マデ来テシマッタ。其ノ香ハ櫻ノ花デアッタ等ト云ヒ又、白檀ノ様ナ香ノヨイ木片ヲ珍蔵シテ、香櫻ノ材ダ等云ッテ居ル人モアリマスガ、前ニ申シマシタヨウニ傳説ニアリガチナ誇張セラレタ符曾デショウ。（後略）

まず「木のもとに汁も鱠も桜かな」という芭蕉の句についてだが、「風麥芭蕉交筆懐紙」によれば、元禄三年（一六九〇）に伊賀上野の藤堂家藩士・小川風麥亭で催された歌仙の発句で、風麥の脇句は「明日来る人はくやしがる春」であった。この句は全国の桜の名所に碑が建てられているとかで、近くでは半田市の白山神社、岡崎城内の巽閣前に見られる。挙母神社の句碑は寛政十一年（一七九九）に建てられた。長い間、台座もなく草に埋もれて忘れられていたようだが、大正十五年に、地元の俳人によって現在の地に移された。挙母が桜の名所だと自負していたあらわれであろう。

著者は、中町裏の路傍の匂桜、挙母神社の匂桜について述べ、いづれも朽ち果てた古木であったと記している。挙母神社のお話でも、匂桜の朽ちた株は社頭の横にあったとのことである。中町とは、現在の桜町のことで、挙母神社西に通じる小道までの狭い地域をいった。その桜町（中町）には、桜城址がある。

桜城は、慶長九年（一六〇四）に三宅康貞が一万石で入封して築城し、挙母藩の礎を築いた。このとき城の内外に数多の桜を植えたことから桜城と呼ばれるようになったのだが、度重なる洪水に悩まされ、寛政六年（一七九五）に、高台である童子山に城を移したのだった。したがって匂桜の歌の成立の頃は桜城の存在はない。具氏は桜城にある匂桜を詠んだものと思い込んでいたのだが年代が違うのである。

これは私見だが、匂桜は挙母神社領域の杜にあった、それが後世、偶然にもこの地に桜城が築城された、さらに後世、何かの事情により匂桜は挙母神社の現在の地に移ったのではないだろうか。挙母神社、中町裏の路傍、桜城……、匂桜の旋転の経過は知る由もないが、確かなことは、いにしえ、匂桜と歌にも詠まれるほどの名木が、年を経て、枯れ果て、切り株となり、それを懐かしむ人々によって、歌とともに語り継がれてきた、ということであろう。

挙母神社の匂桜歌碑は、昭和四十五年六月に建てられた。匂桜と芭蕉句碑とは並んでいたというが、忠順が芭蕉の句について記したものは見当らなかった。芭蕉句碑は大正まで草に埋もれていたというから、案外、気づかなかったのかもしれない。

3

ところで、前記の「挙母郷土史」に引用された「東行説話」にはその先があって、「……名に負ふ衣の里と云へ侍れど、程遠ければ見にも行かれず」と続く。ころもの里は、東海道、鎌倉街道ともに五里とは離れておらず、急ぐ旅ならば見にも行かれなかっただろうが、急がぬ旅ならば寄り道をして

ほどちかく衣の里もなりにけり
二むら山をこゑて来つれば
藤原　経衡（千載和歌集）

という人もいたのである。

大宝二年（七〇二）十月、持統天皇は三河を行幸された。宝飯郡御津町まで船で、そこから宮路山を経て、渡刈、末野原で狩りをされたという。その時の歌、

梓弓すゑのはら野に鳥狩りする
君が弓弦のたゆむとおもへや
（万葉集　巻十一・二六三八）

詠者は万葉集には明記されていないが、歌碑には、光明峯寺入道前摂政太政大臣と刻まれている。この歌碑は大正四年に渡刈町の糟目春日神社に建てられた。忠順没後のことなので、この歌碑は見てはいないが、万葉集には熟知していたので、この梓弓の歌も、勿論、知っていただろう。もしかしたら忠順も、万葉集ゆかりのこの地を訪ねたことがあるのかもしれない。

忠順は刈谷藩に仕える医者であったが、何事にこだわる事もなく、自在に往来していたと思われる。挙母、岡崎はすぐ隣だし、平針街道、東海道、鎌倉街道は自宅目前である。三河の片田舎とはいえ、決して辺鄙な土地ではなかったのである。

枯れ木から花が咲いた、あるいは、良い香りがしたということについては、残念ながら何も出てこなかった。引用した挙母郷土史にある「白檀の様な香のよい木片を珍蔵して、香桜の材だ等といって居る人もあります」とあるように、忠順が会いに行った大田のかれいしという人も、匂桜の木だと思って、枯れた木片を後生大事に持っていたのかもしれない。「にほひさくらをよめる」歌にある大田のかれいしが誰であるのかも、とうとうわからずじまいだった。

弘法大師が杖を立てたところ花が咲いた、あるいは清水が湧いたという話は各地にあるらしく、額田町の桜井寺にも、この話が伝えられている。

額田の山に分け入ると、桜井寺は谷間の片側に寄り添うように建っていた。満開の桜が人影のないこの寺を華やかにしていた。件の井戸は庫裏脇から急勾配の山道を登ったところにあった。大師御堂の下に井戸があり、その傍らに、実生から育ったと思われる桜の木が立っていた。里人が霊験あらたかな水と崇めて汲みにくるそうである。四方から、木々を渡る風の音が聞こえていた。森に住まう樹木たちの精霊の声のような気がした。

4

遠い昔のその昔、三河の国のころもの里に、美しい一本の桜がありました。春の盛りには、満開の花があたり一面を明るくして、それはそれは香しく咲き誇っていました。人々はうち揃って花見に出かけ、口々にその桜を誉めたたえていました。遠い都にもその名は知られ、大宮人・藤原具氏卿もこの桜を歌にも詠まれ誉めておられました。しかし、いつの間にかその木は枯れて、思い出す人も、その桜について話をする人もほとんどいなくなりました。

大田のかれいしが、桜の枝を持っていると聞いたので、はるばる訪ねていきました。ところが残念なことにその木は枯れていました。けれども、どうしたことでしょう。不思議なことにその枯れ木には花が咲いていました。陽に映えてそれは美しい様でした。

満開の桜の花のもとに佇んでいると、遠い昔、大宮人にも詠まれたという桜にまつわるあれこれが思われてきます。

忠順の「にほひさくらをよめる」歌を、私はこのように読んでみた。はじめに述べたように、この歌との出会いは、石川小歩先生が「村上忠順と蓮月」展をご覧になり、この一幅に足を留められ、そして、解読してくださったことからはじまった。「裏付けはあなたがなさるように」、解読に添えられていたお手

紙にそう書かれていた。

さて、十分な裏付けができたかどうか、そして、私が勝手に読んだ歌の意がこれでよかったのかどうか。小歩先生の解読を汚す事にならなければよいがと思うばかりである。

忠順の「にほひさくらをよめる」歌に誘われ、桜を追って思わぬ遠出をしてしまった。取材先は何処も美しい桜に包まれていた。思い出深い春になることだろう。さまざまの事思はれる桜かな、芭蕉

（中島登喜子）

「遷祠碑」について

平成十年十一月二十三日

前林町　桜田57番地　高橋碇之介

満徳寺の山門の右手に自然石に刻まれた高さ2メートル程の碑があります。これには前林神明社を当地に移して来た経緯が記録されています。万葉仮名で書かれているので当初は何が書かれているのか見当もつきませんでしたが内容が分かってきました。

この碑文を起草した方、清書なさった方、字を刻んだ石工の方が分かってきましたので報告します。

尚、碑文の読み下しについては豊田市民芸館館長の田畑さん、知立神社　宮司の神山さん、刈谷市中央図書館郷土資料室の平野さん等に大変おせわになりました。

碑文について

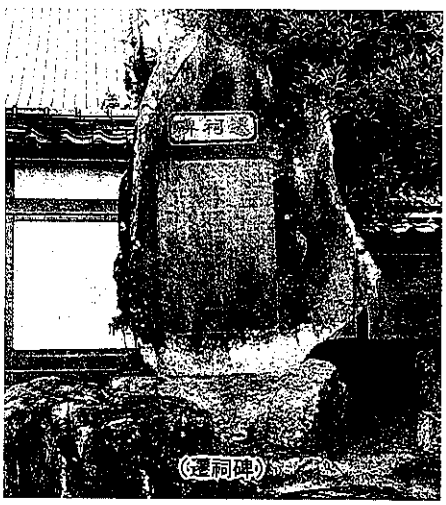
一、碑文の起草者

村上忠浄（むらかみただきよ）氏です。人物紹介は堤誌に詳しく載ってますので添付資料として付けました。関係のある村上忠順、村上忠明も付けました。村上忠順の著書は刈谷図書館に村上文庫として保管されてますが、村上忠浄の作品は少なく珍しいものだそうです。

二、碑文の読み下し

皆様に読んで頂きましたがこの読みが確定したものではありません。皆さんが読んで下さったもので一番自然と思われたものを私の責任で整理しました。今後とも検討したいと思いますのでご意見をお願いします。

神山宮司さんのお話では万葉仮名・漢字の使い方など相当に凝った使い方になっているとのことです。



（遷祠碑）

三、碑文の概要

「世の中が進歩し、人びとの気持ちも開けて行き何事も便利になって行くのは喜ばしいことである。

この前林神明社は里を離れた山の上にずっと祭られて来て、遠くには在るがまず神様のことをする様にと気を付けて来たがなかなか守り難くなっていた。

里の人々がお参りも不便であったので、昔神社が在ったと言う「古宮」という辺りに神社を移してはと勘案するうちに神明社の他に八幡社と秋葉社の二柱も合わせてお祭りすることにし、前林北の清らかな場所に移して草木を植え、神々しく整えて、この地の守神としたのは土地の人々の神を敬う気持ちが厚く深い為に実現出来たことである。

神々もどんなにか喜ばれ、永遠にこの地にあって、地域と人々の安全を守って下さることだろう。

この様なことから、人々の明るく・浄い気持ちをもって神事を後にすることのない様に神社を里の近くに移して女性でも子供でも、何時でもたやすくお参りが出来る様にと今回計画を立てたのは非常に大変なことでありますので、明治廿八年七月十五日を吉日のなかの第一の吉日と選んで神社を移し、お祭りすることになりました。

そのことを碑に刻んで記録することにな

りました。
明治廿九年五月八日
村上忠浄　識（碑文を起草しました。）
中野以祐　謹書（碑文を清書しました。）
斉藤勘四郎　刻（碑文を刻みました。）

清書した中野以祐氏について

一、経歴

詳しいことが分かりません。
たまたま「高岡町誌」第2章　明治大正時代の教育　第2項　鼎高等小学校の記事の中に名前を発見しました。
添付資料にその部分を付けましたので参考にして下さい。
要は、明治30年9月　堤・竹・若園の三ケ村組合立で高等小学校（これが鼎高等小学校）を設置するときに当時の堤村の村長をしておりました。
この裏付けを得ようと歴代の村長について調べて見てみましたが明治39年、町村合併により竹村・花園村・堤村・駒場村が高岡村になった後の記録きりありません。
それ以前の記録について、豊田中央図書館で「碧海郡誌」「こまんば誌」「私達のふるさと乙尾村」、岡崎図書館で「愛知県碧海郡高岡村沿革史」を調べましたが見当たりませんでした。
更に調査を進めるとすれば愛知県公文書館などで当時、県に提出した公文書を調査することが考えられます。
また地元の方のお話では、子孫はおいでにならないとのことです。

二、鼎高等小学校について

関係する部分を添付資料に付けましたので参考にして下さい。鼎高等小学校遺跡記念碑が、若林西町北間のまるみ建材店の前、道路沿いにあります。まるみ建材店のおばあさんが花壇も作ってきれいにしています。

三、文字の書風

豊田民芸館の田畑館長は「千体文字の基本を忠実に守った、素直な良い感じの文字との印象をうけた。」と言われてました。
千体文字とは講談社　日本語大辞典によれば「漢字千字からなる四字句の漢文で、中国梁の周興嗣の撰によるもの。漢字の手本などに用いられた。」とあります。

石工　斉藤勘四郎について

一、調査の概要

石工に一番関係の深い近くの町として岡崎に行き図書館で関係のありそうな資料を当った結果、岡崎石製品共同組合連合会の「組合設立一〇〇年記念誌　石と共に生きる」の師弟家系図の中に斉藤勘四郎氏の名を発見することが出来ました。
次の土曜日岡崎市上佐々木町にある同石工団地共同組合の事務所を尋ねて趣旨を説明した所これらの事情に詳しい塚本嘉一氏を紹介してくれました。
早速自宅にお邪魔しておはなしを聞かせて頂いた結果が以下の内容です。
塚本嘉一氏は、若い頃から石工の職につき、戦後は岡崎石工団地共同組合の設立に大きく関与した方です。
石工・石造物に関する調査研究を長年続け多くの著作があります。

二、分かったことがら

・碑文の文字を刻んだ斉藤勘四郎氏は杉本屋嶺田本家の七代目「久七」の弟子です。
・嶺田氏の祖先は三州設楽郡松平村から出て、岡崎裏町で石工業を営んだ様子で、明治時代まで本家・分家があり大きな勢力を誇っていましたが現在石工業を継いでいる人は無く途絶えました。
塚本嘉一氏の著作「石の匠」によれば、明治37年の岡崎商業会議所議員選挙人名簿によると、岡崎市内の資格者四百十名のうち石材関係者は九名であり、嶺田久七は納税額　金十六円三十銭で石工関係ではその筆頭に記載されています。
・又岡崎市門前町にある随念寺の墓地の一番奥まった最上部に嶺田家の墓地があります。五代目嶺田久七の石碑の陰には上に述べた祖先からの由緒が書いてあります。
この随念寺は徳川家康が、祖父松平清い康とその妹久子の方の菩提を弔う為に建立したものです。
東海道を見下ろす丘陵地帯に建てた一連

の寺社の中でも幕府の庇護が厚く城の防衛拠点としても重要な位置であったことを考えると当時の嶺田家の繁栄振りが想像できます。

・斉藤勘四郎氏も子孫は石工業を数代続きましたが現在は途絶えてます。組合員名簿・電話帖にも記載は無く塚本氏も記憶に無いと言うことでした。

組合に残る物故者名簿からは斉藤氏は明治末の年代に亡くなられた模様です。

三、嶺田家系の石工の作品例

・岡崎市梅園町　誓願寺にある燈籠は嶺田分家　嶺田信治郎氏の作品です。（昭和4年9月　建立）

・岡崎市明大寺町　乙川に掛かる殿橋の主橋に刻まれた橋名は永田嘉一氏の作品です。（昭和2年7月　建立）

（塚本嘉一氏の父）

遷祠碑

世廼開計底人乃心進行隨萬便與久飽
奴夏那九整　行南武米傅多迦利家流　抑是
能前林　廼神明社波里乎離　之山巓　耳許々
良廼歳月齋　祭来　志母廼加羅　然遠　支方二
天半　先神夏後他夏　登以遍留誠　尓毛違勝
爾提常尓郷人能詣拜仁便　悪家礼婆伊可泥昔
鎮　坐　之　古宮刀以不遷迩遷　奉良牟止
夏議流尓　耶雅帝神明社廼保加仁八幡社秋葉
社乃壹柱表茂併　奉里弖字前林　北登伊布清
地爾移　奉利　佐々麻々能樹平母植並　氏
尊　久厳　伎此郷乃近幾守　神止奈志奉理之
破里廼人々淤志難敝天神　伊都支廼志　厚久
深伎迩豫禮留也計利　阿巴連大神乃大御心
二以茂以咎　婆加離喜　波之玖念食　常磐堅
磐耳鎮座　天郷人能家尓毛身　迩母禍夏安羅
勢須守　幸曳給婦良武　許方彼進　行人廼明
浄心　餘利神　夏遠後尓世万自刀思不故爾低
斯久郷近玖遷　奉里弓女　童二至琉麻　田毛
夜書斗那九容易詣　無乃太伐加利奈例婆甚々
茂々於無賀之幾
業仁古曽故明治廿八年　七月十五日　表　生
日廼足日登撰定低　遷　奉麗流御祭　仕弊
奉良牟止志弓其故　由書識　之置爾那武有氣
留

明治廿九年五月八日

村上忠浄　識
中野以祐　謹書
齋藤勘四郎　刻

歴史探訪記

―忠順の足跡をたずねて―

忠順翁顕彰会は、平成の年号と共に発足しました。歳月の流れは早く今年は十周年を迎えました。

忠順の足跡をたずね忠順翁を顕彰する旅、歴史探訪も回を重ね十回となりました。時の移ろいを数えるとき十年は一つの節目であり、又区切りとして意義深く扱かわれるのが常でありましょう。

さて、十周年を迎えた当顕彰会が記念事業の一つとして念願し、市へお願いして来ました「忠順と蓮月展」が郷土資料館において実現し、村上家のご協力により貴重な資料が公開されました。展示には市内外から多くの人に参観して頂きました。遠くは、遙々東京・京都・広島からのご来館もありました。

又、十周年にして忠順と石川丈山の関係についても会員の皆さんにお伝へする新らたな発見もありました。

節目の年を迎えた歴史探訪についてもやはり意義ある旅でありたいと役員一同協議しその結果「大田垣蓮月尼墓参と石川丈山隠棲の地詩仙堂をたずねる旅」となりました。

今回もバス満席の参加申込みを頂き十一月十三日晩秋の京都へ出発しました。

第一の目的地神光院へは予定時刻を少し遅れて到着。全員神光院の一室へ案内されここで前もってお願いしておいた神光院徳田光圓和上から蓮月尼についての講話を聞く機会を得ました。

顕彰会が神光院を訪れるのは二回目となりますが和上の話しを聞かせて頂くのは初めてです。和上はどのような人であろうかと想像し機待をもったのは私一人ではなかったと思います。和上は、蓮月尼の遺品（書、陶器等）

を前にして大変貴重な話しを聞かせて下さいました。和上は気品に満ちた細身で黒い衣のよく似合う人でした。

（光圓和上）

蓮月が神光院を訪れ、月心和上、智満和上に出合ったのは七十四才のときでした。その翌年七十五才のとき神光院に移り住んでいます。

蓮月はここで真言宗の仏法を学び修業をしました。

蓮月の生涯のうち前半生は、初婚に破れ再婚の夫には先立たれ、生れた子供は次々に早死するという不幸の連続でした。後半生は、剃髪し和歌にいそしみ、蓮月流といわれる独特の書体を完成し、また作陶も従来の京焼にみられなかった和歌彫りの蓮月焼を創作し幕末の京都文化に大きな影響を与えました。明治八年（一八七五）八十五才の生涯を神光院茶所で閉じました。

（神光院茶所）

忠順と蓮月の出合いは、嘉永四年（一八五一）歌を介した文通により始まり、その交友関係は二十年余に亘りました。この間の多くの書簡や蓮月焼陶器は現在も大切に村上家に保存されています。

神光院主人にお礼をのべここからほど近い蓮月尼の墓所まで畑の残る小路を歩きました。

墓は小高い斜面の広い墓地の中程にありこも顕彰会は二回目の墓参です、墓石は質素な自然の丸い石で正面に富岡鉄斎の筆で「大田垣蓮月墓」と刻まれていました。

顕彰会より持参した供花と線香を手向け、ありし日の蓮月と忠順の交友を偲び合掌、冥福を祈りました。

午前中の日程を終え昼食は名鉄バスの紹介で閑静な和風建築のおつな店「しようざん」で会席料理を賞味した、しかし、少々値が張って会計は赤字とか、まあその分忠順翁と蓮月尼の供養代として顕彰会が負担、参加者は感謝〳〵。

午後は、もう一つの見学地詩仙堂へとバスを走らせました。詩仙堂はすでに訪れた会員もおられたことと思いますが今回は忠順と丈山のかかわりを知った上での訪問です。

忠順は、石川丈山を深く尊敬し自ら撰文（せんぶん・文章を作ること）し、娘婿の深見篤慶が私費を投じ慶応元年（一八六五）「石川丈山舊里碑（きゅうさとひ）」を建立しました。

この碑は、一三〇年余を経た現在、丈山生誕の地、安城市和泉町の静寂な里「丈山苑」に見ることができます。

バスは、洛北の一条寺下り松の近くに駐車し一行はここから徒歩で詩仙堂へ向いました。足の弱い会員には難儀な坂道でした。詩仙堂は丈山がわが国の三十六歌仙にまねて狩野探幽筆の中国三十六歌仙を室内の壁に掲げたところからその名がついたもので堂は寛永十三年（一六三六）に建てられ詩仙の間は当時の姿を残していました。

以上で、今回の研修の旅「第十回歴史探訪」は終了し、皆さんには今日一日の思い出を胸に家路へ向うバスの人となり無事帰宅することが出来ました。

事務局記

（付）丈山点描

丈山生誕

一五八七年三河国碧海郡泉郷（現・安城市泉町）で生れ、代々松平家に仕える。

名と号

名を重之。通称嘉右衛門、後改め左新衛と称す。雅号は六六山人・四明山人・凹凸窩・大拙・鳥鱗子・山本・山材・薮里翁・東渓・三足老人など。

大坂夏の陣

三三歳のとき出陣「先登」という軍令に問われ蟄居の身となり学を志す。

儒学を学ぶ

林羅山を介し、藤原惺窩と出会い儒学の教えを受ける

隠棲生活

一六四一年五九歳で京都洛北一乗寺に詩仙堂を開き風雅を楽しみ、詩作に遊び悠々自適の生活を送る。

文人丈山

丈山は江戸時代初期を代表する漢詩人・隷書をわが国で初めて取り入れた書家・作庭家・煎茶は、日本の開祖といわれる。

丈山歿す

一六七二年（寛文一二年）五月二三日、望郷の念を抱き世俗の名利名聞を嫌い一切の我欲を排し、文雅に徹した丈山も数人の弟子に見守られ九〇歳の天寿を全うし、葬儀は遺言により儒礼で行なわれた。

（出典・「丈山の世界」安城市教育委員会発行）

表紙のことば

蓮月画像（部分）

富岡鉄斎画・谷鉄臣賛

（神光院蔵）

おぼつかなくも、たゆみなきよう歩みつづけて早や十年。当顕彰会の歴史探訪は、再び京都西賀茂の地を訪れ蓮月尼の墓参を行ないました。

名を誠といい三十三歳のとき、知恩院大僧正によって剃髪式を受け蓮月という法名を授けられました。

嘉永四年（一八五一）頃から手紙により始った忠順と蓮月の交流は二十年余りにわたりました。明治八年、忠順は神光院を訪れ蓮月に合っています。これが最後でこの年の十二月十日の夕刻、蓮月は八十五歳でこの世を去りました。

蓮月が生前から用意していた経帷子と遺体を句む白木綿の布には、つぎの歌が書かれていました。

ちりばかり心にかかる雲もなし
　けふを限りの入相のそら
ねがはくばのちの蓮の花の上に
　くもらぬ月をみるよしもがな

遺体は神光院の西方、西賀茂の墓地に葬られ、墓石には鉄斎の字で「大田垣蓮月墓」と刻まれています。

編集後記

今回も、簗瀬一雄先生より「忠順とその周辺の資料(三)」のご寄稿を賜りおかげで会報に一段と重みをつけて頂いた。けだし、いさゝかむづかしい。精読するうちに我々にも理解できてくる。思わず苦笑のケ所、又きつい忠順の指摘に心をとめるとき忠順の学識と人柄が伝わってくる。

前九号では、浅学な事務局の編集ミスにより誤字が多く今号に正誤記事を付けさせて頂きお詫びします。

さて、今号は新たな出合と発見の中で、忠順の貴重な資料、匂桜と忠順、石川丈山と忠順、忠浄の識「遷祠碑」（前林神社移しまつる石ぶみ）など紹介することが出来ました。

ご寄稿下さった方々に心より感謝します。

発足十年の節目を迎えた当顕彰会はこれからが正念場。各位のご指導と会員の皆さんのご支援で私たちの誇れる忠順翁の顕彰が更に深まることを願いつゝ……。

事務局記